

かわだんぎ
川談義 (2)

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会

第 1号-2

平成30年1月

「川遊びの思い出」

NPO 法人 北上川流域連携交流会 理事長
軍司俊道

最近、昔買い求めた本や図書館から借りてきた本を読みあさっている。主に‘草花’に関するもので、川との接点はほとんどないのですが、今回紹介する随筆は、岩手県盛岡市出身の俳人の山口青邨氏(1892～1988)の「花のある随筆」からの一文で、90年以上前の『川狩』の情景が描かれていました。これは私の子供の頃(50年以上前ですが)の川遊びそのものでした。

なお、原文は旧仮名づかいで読みにくいかと思い、現代文風に書き直しています。

「花のある随筆」山口青邨氏
(1892～1988)



私の郷里というのはあの北上川も、ずっと上流になった山に囲まれたM市である。その町を貫いて、中津川という川が流れている。水泳の稽古したのも、この川だし、雪解けの水に流木を止めようとして一緒に流されて、溺れそこねたのもこの川である。

夏になると朝から晩まで何百という河童がこの一筋

の川へ集まって、泳いだり、釣り糸を垂れたり、網を打ったり、掬ったりで、往来の魚どもを、おびやかすのであった。

私などもそのあらゆる方法を試みたのだが、今そのうちの夜突きと俗に呼んでいる方法を述べてみよう。

中略

川に入って、カンテラに火を入れる。硝子箱を左の手に支え、ヤスを右の手に構え、顔を硝子箱の中へ突っ込んで川底を覗く。

一体、この辺で取れる魚といえば、先ず、かじか、はや、あゆ、うなぎといったようなものだ。最もたくさんいるのは、かじかだ。これはブル・フィッシュという種類で、昼間は石の下にへばりついている頭のでっかいはずに似たいたって鈍な魚である。その他のものは別に説明を要さないであろう。

石の下を這い出たかじかは砂利の上や、石ころの上、あるいは石と石との間に身を寄せている。それを狙いを定めて、ヤスで突き刺すのだが、砂の上にいるのは一番突き易いが石の上に乗っかってなどいられると閉口だ。この魚は一寸保護色を持っているので、よく見損なったり、あるいは木片などをそれと間違っただけで突いたりすることがよくあるが、そんな時はひとりで吹き出してしまふ。

突くには勿論上手下手がある。撃剣と同じだ。頭が大きいから大抵頭をねらうのだ。突きそこねても、あまり遠くまでは逃げないのだから、その辺を探せばきつという。時に馬鹿な奴になると人の足の裏にもぐり込むのがある。くすぐったくて仕様がないうが、我慢して踏んまえて手で捕まえてしまふ。

中略

うなぎという奴はまた、全身をさらけ出しているのにぶつかるとは稀で、大抵は体を半分ほど見せて石と石との間に身をひそめている。こういうのにお目にかかるの大ものだけにドキンと胸に応える。どこをどいう風に突

いたものかとまず考える。尻尾などがちょっと出ていることがあるが、尻尾などではなかなか突き刺せない。丁度背中などだと大変便利だがそうお誂え向きに出ていることが少ない。たまに頭を出して、あの頬ぺたの鰓をふくましたり、すぼめたりしているのを見ると全身の血が凝結してしまうほど、たまにアセアセして来る。突き刺す部分が充分出ている時は、ヤスを構えてじっと監視していると、ぬるぬるぬると動き出して、いい具合に背中か、腹を出して来る。それを見はからって突き出すのだ。しかしうなぎもなかなか敏感だから一寸油断すると機会を失ってまんまと逃げられてしまう。

うなぎを突くと彼奴、ギリギリとヤスにひっ絡んで来る。なかなか力があるので、まごまごしていると力負けして、ヤスを浮かせて、逃げられることがしばしばである。

以下略

昭和40年前半までは何処でも見られた情景かと思えます。しかし、今ではこのような経験をした人はだんだん少なくなって来ていますので、川での楽しい思い出を次世代に引き継ぐのも大事な事かなと感じています。

